

# 日露戦争期における軍馬碑についての一考察

——長野県山形村での事例をめぐって——

森 田 敏 彦

はじめに

日清戦争以後の対外戦争に数多くの軍用動物が動員され、兵士とともに戦場で戦い斃れた。戦死し帰らなかった軍用動物を慰霊し記念するための碑が全国各地に現存している。現在、筆者が各種資料にもとづいて把握している軍用動物碑の数は一〇〇〇基近くに及ぶが、漏れ落ちているものをあわせればさらに多数の碑が現存しているものと推測される。その圧倒的多数は軍馬のための碑であるが、その建設時期は、日露戦争開戦から第一次世界大戦に至る時期と日中全面戦争開戦からアジア太平洋戦争開戦に至る時期に集中しており、そのどちらの時期においてもアジア太平洋戦争終結までに建設された軍馬碑総数の三分の一をこえる碑が建設された。筆者が把握している軍用動物碑を種類別にわけると、全体を通しては、①馬頭観世音や馬神碑などが最も多く約三七パーセントをこえるほか、②慰霊・供養碑系統のものが約一六パーセント、③記念碑が約一四パーセント、④忠魂碑が約五パーセントを占め、⑤残り約三〇パーセントが単に「軍馬之碑」などと記銘された碑となっている。これを日露戦争開戦から第一次大戦までの時期に限れば、①の碑が約四八パーセント、②が約九パーセント、③が約二四パーセント、④が約二パーセント、⑤その他約一八パーセントとなり、記念碑の比率が高いことが目立つ。個人や有志の共同によって

建設された、馬頭観世音型と慰霊碑型を合わせた碑が過半数を占めていることが共通した特徴となっている。

これらの軍馬碑を建設した人々は、軍馬碑を建設することによって何を後世に残したかったのであろうか。軍馬碑については、「戦没軍馬祭祀」の観点から「従来の動物供養の性格に加えて、人間兵士の戦死者祭祀制度の派生的性格の強いもの」ととらえる松崎圭の研究がある<sup>②</sup>。その論考は示唆に富んではいるが、筆者は宗教的側面をはなれて、近代日本の戦争認識を明らかにするうえで軍馬碑の碑文を考察することが有意義であるという立場から軍馬碑をとりあげてみたい。なぜなら戦争碑は、建設者が戦争にかかわる記憶を意識的に伝えようとしたものであり、その碑文を系統的に分析することによって各時代の戦争に対する民衆の意識をとらえることができるからである。しかも戦争碑のなかでも軍用動物碑は、軍人を対象にした碑と比べて、より直截に建設者の意図を反映しているものとみなされるからである。本稿では、長野県東筑摩郡山形村に現存する日露戦争期の軍馬碑を事例に、どのような人々が、いかなる日露戦争認識のうえに立つて、それらの軍馬碑を建設したのかを考察し、近代日本の戦争認識を探る一助にしたい。

## 第一章 日露戦争における軍馬と軍馬碑建設

### 第一節 日露戦争における軍馬使用

日露戦争における戦役参与総馬数は、内国産馬一九万七一二八頭、鹵獲馬三七四五頭、中国産馬二万二二三頭の計二二万三〇九六頭であった。これに対し戦地諸部隊での軍馬の減耗数は総計三万八三五〇頭で、うち戦傷死は四五六二頭、病死は一万七九三八頭である。用役別では乗馬七六九六頭、砲兵輓・駄馬七一一〇頭、輜重輓・駄馬二万三五四頭であり、輜重馬の斃死数が全体の六一・四パーセントを占める。戦役参与総馬数に対する損耗比率

は、内国産馬全体では一六・九五パーセントにおよび、砲兵・輜重輓・駄馬だけに限れば二〇・一四パーセントであった。<sup>(3)</sup>

これらの損耗軍馬は、行軍・戦闘のなかで、疲労の極に達して落伍したものや、被弾して斃死したものなどであり、その状況は悲惨を極めた。<sup>(4)</sup>

## 第二節 メディアによる軍馬碑建設のすすめ

軍人の戦いぶりが新聞・雑誌や錦絵・石版画などの刷り物によってセンセーショナルに伝えられ、各種の『忠勇美談』が出版されたのに比べると、軍馬の戦場での「武勲」や犠牲は、はなばなしく扱われることはなかった。しかし、戦争が激しくなり斃死する軍馬が増大するにつれて、新聞は軍馬の犠牲の大きさを伝えるとともに、次のようにその働きをたたえるようになった。

「日露戦争始まりて以来、我が将士の忠烈なる振舞は、鬼神をして且つ泣かしむるものあり。殊に其最後の悲壮なるものに至ては、譬ふるに言なく、語るに辞の盡すべきものあるを知らず、唯々涙に次ぐに涙を以てこれに対すべきのみ。戦士の忠勇義烈夫れ斯の如し、若し彼の軍馬の働きの雄々しく、勇ましきを聞くもの、また何ぞ深く感ぜざるなきを得むや。（中略）たとひ平生能く飼馴されありとはいへ、砲煙弾雨の間に馳駆して己の役目を盡し、殊に蜂の巣の如くに銃丸を受けながら其場に死せずして、帰隊の後始めて斃れたりといふ類に至つては、果して獣畜を以て待つべき働なりや否や、吾人はこれを勇士の最後に比べて、毫も劣る所を見ざるなり」（「戦士と軍馬」<sup>(6)</sup>）

「知らずや日露開戦以来各地の戦場に於て殞れたる可憐なる軍馬の如何に多かるべきかを。吾人は今正確に戦死軍馬の数を挙げて之れを読者に報ずるを得ずと雖も、開戦以来或は戦線に或は兵站線に憐むべき最後を遂げたる軍馬の数は実は何万何十万の数に達すべきやを疑はず。軍の活動する戦闘線に於ては勿論、苟も軍隊の進行する境域に於て、或は砲車を牽き、或は弾薬車を引き、或は縦列に伴ひ、或は輜重を負ひ、全身埃に汚れ泥に塗れ、流汗地に滴り、蹣跚踉蹌、幾多の艱苦に堪え幾多の欠乏を忍び、嚴寒と戦ひ酷熱と戦ひ、餓えて訴へず、鞭たれて叫ばず、一言の不平を鳴さず、一語の怨みを言はず、唯々として軍隊の使役を甘むる幾十万の軍馬を見ずや」〔軍馬の戦功〕

このように論者は軍馬の苦難や功績を強調したのであるが、それだけにとどまらずさらに筆を進めて、つぎのように戦没軍馬のために馬頭観音や記念碑を建設することをすすめた。

「無闇に馬頭観世音の建碑を奨励して迷信の火に油を注ぐにはあらねど、戦争終局後に於て、軍馬の為に一碑石を立つる位の事は、敢て甚だしき謗なかるべきを信ずる也」〔同「戦士と軍馬」〕

「人にては論功の沙汰あり、戦功表彰の法あり、遺族の救助あり、同情の涙あり。然も是等可憐の動物に対しては世上尚未だ僅少の同情者ありたるを聴かず。人として而も軍国の国民として尚忠義心に乏しく動もすれば自己の利益のみを思ふて不正不義の行動を敢へてするものなきにあらず。一功を樹て寸労を貢したる村夫子のためにすら銅像を建てむとする人々さへある今の世に於て、等しく軍国のために殞れたる彼等可憐の動物の戦功を思はゞ、国民は彼らの為一基の記念碑を惜むべからず」〔同「軍馬の戦功」〕

政府は、日露戦争を期として急増した慰霊碑や記念碑に対して、一市町村内に二ヶ所以上建設することを禁止する通牒を一九〇五年六月に出すなど、個人による碑表の建設を抑制する方針を打ち出していた。<sup>⑧</sup>しかし、こうした政府内務省の方針にもかかわらず、「記念碑に対して一市町村内に一箇所を限ると云うは社寺取締の側より言うことにして人民が官有地を借受け若くは私有地に建設するは随意にて此限に非ずと知るべし」というような主張がなされ、戦没者碑が数多く建設されたのが実情であった。<sup>⑩</sup>前述したように軍馬碑も日露戦争期に数多く建設されたが、その背景の一つに、このようなメディアの報道姿勢があつたことを指摘しておきたい。

## 第二章 長野県における日露戦争期の軍馬碑建設

### 第一節 長野県における軍馬碑の現存状況

筆者の資料調査による都道府県別の軍馬碑残存数をみると、茨城・栃木・長野の三県がそれぞれ一五〇基以上と群を抜いて多く、そのなかでも長野県では、在野の研究者の手で県内の軍馬碑の詳細な調査が行われたこともあつて、全国で最も多くの軍馬碑が現存していることを確認できる。長野県内で確認された軍馬碑総数一八七基のうち戦前に建設されたものは一六九基であり、その半数近くの八一基が日中戦争期に建設され、日清・日露戦争期の建設数はそれぞれ全体の四分の一程度である。日露戦争に関係する二三基の碑は表1のようになる。

### 第二節 長野県における日露戦争での馬匹徴発

日露戦争に関する軍馬碑が建設された背景として、長野県の日露戦争における馬匹徴発状況をみてみよう。一九

表1 長野県における日露戦争軍馬碑

| 碑 銘                      | 所 在 地                          | 建設年月日         | 建 設 者             | 典拠        |
|--------------------------|--------------------------------|---------------|-------------------|-----------|
| 1 日清日露戦役<br>軍馬記(紀カ)念碑    | 松本市大字今井                        | 1906          | (共同)              | N         |
| 2 愛馬沼台磯浜之碑               | 飯田市上郷飯3335、雲彩寺                 | 1906・4        |                   | N・G       |
| 3 陸 軍々馬 華 (N<br>は卒) 笠号之碑 | 大町市北原古城                        | 1905・6・5      | 陸軍騎兵軍曹<br>平林濱吉    | N・G       |
| 4 日清日露戦役<br>軍馬紀念碑        | 塩尻市洗馬上組下平                      | 1906          | 応命者南原富太郎<br>ら14名  | N・G       |
| 5 征露戦死軍馬碑                | 塩尻市洗馬芦ノ田慈眼山心念堂                 |               | 清水啓蔵・田村北<br>蔵     | N・G       |
| 6 愛馬碑<br>(KM は忠馬碑)       | 佐久市(旧望月町)入布施(西水無)、<br>荻原明夫宅    | 1907・3・10     | 陸軍騎兵<br>荻原佐久一郎    | N・G<br>KM |
| 7 戦死愛馬<br>温成号塔           | 佐久市塚原上塚原字宮の前                   | 1906・8        |                   | KS        |
| 8 故軍馬水揚碑                 | 安曇野市(旧穂高町)穂高牧353、<br>宮島達喜宅     | 1906・12・1     | 陸軍騎兵軍曹<br>宮嶋充一    | N・G<br>H  |
| 9 明治三十七八戦役<br>従軍馬頭観世音    | 更埴市打沢地区日向、月山公園                 | 1905・3死       | 宮坂官雄              | KU        |
| 10 日露戦役愛馬<br>馬頭観世音       | 駒ヶ根市北割一区、<br>池上晶登宅裏            |               | 砲兵池上氏             | KG        |
| 11 征露出戦紀念<br>馬頭観世音       | 小諸市八満原村字駒形                     | 1909・4        | 陸軍歩兵一等卒<br>渡邊幸造   | KK        |
| 12 日露戦役板橋<br>馬頭観世音       | 上水内郡信州新町弘崎下中山                  | 1904・7        | 吉原友由              | N・G       |
| 13 軍馬代馬<br>馬頭観世音         | 上水内郡中条村月夜柵、<br>天満宮祠付近          | 1904・7<br>・2カ | (個人)              | N・G       |
| 14 駿馬崎血号碑                | 南佐久郡富士見町子の神                    | 1905・7        |                   | G         |
| 15 日露戦役従軍<br>馬頭観世音       | 東筑摩郡波田町上波田・淡路                  | 1904・4        | 百瀬桃三郎             | G         |
| 16 日露戦役軍馬碑               | 東筑摩郡山形村上大池、<br>コミュニティーセンター南    | 1907・4        | 古畑綱吉・<br>上條文蔵ら11名 | N・G       |
| 17 日露戦役軍馬碑               | 東筑摩郡山形村中大池中村(中<br>大池1389平沢政弘宅) |               | 平澤源作              | N・G       |
| 18 日露戦役駿駒靈               | 東筑摩郡山形村小坂、宝積寺                  | 1905・5        | 宮本金五郎ら16名         | N・G       |
| 19 馬頭観世音                 | 東筑摩郡山形村上竹田                     | 1911          | (個人)              | N         |
| 20 軍馬紀念碑                 | 東筑摩郡山形村下竹田、公会堂敷地               | 1906・3        | 百瀬為次郎ら19名         | N・G       |
| 21 軍馬観世音                 | 東筑摩郡朝日村針尾南村                    | 1905カ         | 清水才治              | N・G       |
| 22 軍馬明月号之墓               | 下伊那郡高森町山吹下平                    | 1904          | (個人)              | N         |
| 23 戦没紀念<br>馬頭観世音         | 下伊那郡阿智村、浄久寺                    | 1909・10・17    | 発起共栄組<br>外有志者     | G         |

注 典拠欄の記号は、それぞれ次の文献によることを示す。

N は、常盤真重「長野県の軍馬碑」(長野郷土史研究会『長野』183号所収、1995年)

G は、関口樸郎『軍馬碑の調査 長野県中信・南信地域』(2005年)、同『軍馬碑の調査 長野県北信・東信地域』(2006年)

KM は、岡村知彦『北佐久石造文化財集成一望月町』(1993年)

KS は、岡村知彦『北佐久石造文化財集成一佐久市北部』(1991年)

H は、穂高町石造文化財編纂委員会『穂高町の石造文化財 解説・資料編』(1994年)

KU は、更埴市教育委員会『更埴市の石造文化財』(2001年)

KG は、駒ヶ根市立博物館『駒ヶ根市の石造文化財』(1997年)

KK は、岡村知彦『北佐久石造文化財集成一小諸市』(1989年)

○三年に長野県内で保有されていた馬の頭数は六万一九二頭で、全国の都道府県別の頭数では九番目に位置していた。<sup>12</sup>『明治三十七八年長野県時局史』によると、同県にたいする馬匹徴発は、第三師団によって三回、第九師団によって一回、計二六七頭について実施され、購買は、第三師団で六回、第九師団で一回、計六〇一頭について実施された。合計二八八頭の馬匹が供出されたことになる。<sup>13</sup>しかし、県全体の馬匹飼養数が一九〇五年には四万七〇〇六頭と、一九〇三年の六万〇一九二頭に比べ全国的に見ても突出した、二割をこえる減少を示していること<sup>14</sup>から、実際はもっと多くの馬が戦場に送られたと推測される。

こうした馬の大きな減少の農業生産に及ぼす影響が危惧されたが、県当局による農業労力不足を補充するための牛馬耕の奨励・普及策などによって、一九〇五年の天候不順による米作の不良を除き、一九〇四年産米の豊作、一九〇四・五年産麦の戦前を上回る増収となった。<sup>15</sup>日露戦争の馬匹徴発は農業生産に限られた影響しか引き起こさなかったわけであるが、手塩にかけて育てた多くの馬が戦争のために村から姿を消し、ふたたび故郷に帰ってこなかったことは、村人に大きな衝撃を与える事件であったであろう。飼主たちは戦場に送られていった馬たちのために碑や馬頭観世音を建て、その記念としたのである。

### 第三章 長野県の日露戦争軍馬碑の特徴

#### 第一節 碑の建設者と碑文の趣旨

長野県内に現存する日露戦争期の軍馬碑表1のうちNo.2、3、6、8、9などの碑は、軍人が乗馬として戦場で使役していた馬のために建設したもの（Ⅰとする）であり、No.4、5、9、12、15、16、17、18、20、21などの碑は、徴発に応じて馬を出した元の飼主が建設したもの（Ⅱとする）である。Ⅰ・Ⅱ二つのタイプそれぞれの建設の趣旨を

みると、Iのタイプに属するNo.6「愛馬碑」の碑文は次のようになって<sup>(16)</sup>いる。

# 6、愛馬碑

高呂石工 三村辰之助

有赤駿予所愛乘而号花都奥州白河産也騎兵第二旅團為所飼養于時明治三十有七年日露之國交一破裂同年二月煥發宣戰之大詔予日東百万之貔貅立而上征露之途予亦五月動員之令下而直入騎兵第十五聯隊□賜号花都駿馬當時云四齡焉然而本團悉隸属 閑院宮殿下之統下上(欠)国柳樹屯頻長驅於朔北之野柳風沐雪砲煙彈雨之中参加於大小(欠損)候兮或伝令兮進退動止能于予意惟從使予竭於軍務而勿遺憾□可□□偉大也哉爾來戰局倍張展而翌年三月十日(欠損)北方乎我支隊追擊之急而我士氣最旺盛(欠損)雨之来不幸而此役此夕花都斃于敵彈噫慘于哉雖然汝等縱橫馳□克命克服之功績決不唐捐露師終至講和於我軍門汝等之力亦大預焉然而遼東之戰雲全收予等軍隊又咸得於凱旋之光榮而汝独不得浴斯光榮者豈不痛哉嗚呼抑汝之屍雖遠曝於滿州之原頭於君国殉難之名長欲伝於後世乃紀念而埋於所齎汝鬘毛併勒厥事由以為祭於汝靈之辞云爾矣

明治四十年三月十日 陸軍騎兵勲八等功七級荻原佐久一郎建之

傍線部分にみられるように、戦場を馳駆し大いなる功績をあげた乗馬をたたえ、それにもかかわらず凱旋の光榮を浴びることなく戦死した馬のために、「於君国殉難之名」を後世の記念に伝えたいという碑の建設趣旨が記されている。

一方、IIのタイプの碑のNo.16、17の「日露戦役軍馬碑」では碑文はつぎのようになっている。<sup>(17)</sup>



16、日露戦役軍馬碑

三十七八年役出軍馬如下記姓名之数今協同而建碑石云

明治四十年四月 宝松山主一屯書

古畑綱吉・上條文藏・中村房吉・大池登・堤倉十・本庄万藏・堤亀市・堤勇次郎・大池丑松・中川直太郎・中村作平

17、日露戦役軍馬碑

源重別敬書

被官命明治三十八年五月十六日出馬匹依茲靈祀 平澤源作

Iのタイプの「愛馬碑」とは対照的に、これらIIのタイプの碑では軍馬の功績にはふれず、馬の飼主が徴発に応じて自分の馬を出したという事実のみを記している。どちらも軍馬を追弔することを前提にしているのであるが、碑の建設者の意図を忖度すると、前者の「愛馬碑」で自分の馬の功績をたたえているのは、「予等軍隊又咸得於凱旋之光栄」という文言からうかがえるように、結局は兵役に就き乗馬としてその馬を使用していた碑の建設者である軍人自身の功績を誇示するためであったと考えられる。それに対して、兵役に就かないで村に居住していた徴発者が建設した後者の碑は、出馬したという事実を村人に告げるとともに後世の記憶のために残しておくことが建設の趣旨だったのではなからうか。

徴発に応じた飼主たちは、なぜ後者のような趣旨の碑をつくったのであろうか。そのことを明らかにするには、彼らが村のなかでどんな階層に属し、どんな社会的地位にあつたかをみる必要があるであろう。

表 2 1904年度山形村県税戸数割賦課分布において  
No.20「軍馬紀念碑」建設者が占める位置

| 等級 | 戸数 | 建設者 | 等級 | 戸数 | 建設者 | 等級 | 戸数 | 建設者 | 等級 | 戸数  | 建設者  |
|----|----|-----|----|----|-----|----|----|-----|----|-----|------|
| 1  | 1  |     | 12 | 5  |     | 23 | 6  |     | 34 | 32  | 1    |
| 2  | 0  |     | 13 | 5  |     | 24 | 8  | 1   | 35 | 42  | 1    |
| 3  | 1  |     | 14 | 8  |     | 25 | 13 | 3   | 36 | 38  |      |
| 4  | 0  |     | 15 | 4  |     | 26 | 24 | 3   | 37 | 54  |      |
| 5  | 0  |     | 16 | 4  |     | 27 | 24 |     | 38 | 60  | 1    |
| 6  | 0  |     | 17 | 4  |     | 28 | 27 | 1   | 39 | 88  |      |
| 7  | 1  | 1   | 18 | 7  |     | 29 | 18 | 1   | 40 | 48  |      |
| 8  | 4  | 1   | 19 | 6  |     | 30 | 32 |     | 41 | 49  |      |
| 9  | 4  |     | 20 | 8  | 1   | 31 | 24 | 1   | 42 | 50  |      |
| 10 | 3  |     | 21 | 7  |     | 32 | 34 | 2   |    |     | 不明 1 |
| 11 | 4  |     | 22 | 6  |     | 33 | 27 |     | 総計 | 780 | 19   |

注 山形村役場所蔵「明治三十七年度縣税戸数割賦課等人名表」により作成したものを山形村教育委員会より提供を受けた。

## 第二節 碑建設者の社会的階層

一八二

日露戦争当時農業生産のために馬を保有していたのは一部の豊かな農民に限られていた。当時長野県の農家一〇〇戸あたりの牛馬数は二五頭であり（二九〇七年<sup>(18)</sup>）、牛馬の比率では馬が九三・八％と圧倒的多数を占めていた（二九〇三年<sup>(19)</sup>）から、農家四戸に一頭程度しか馬を保有していなかったことになる。したがって長野県でも限られた農民しか馬を保有できなかったのであるが、この点は自作農の比率からも裏づけられる。すなわち、一九〇三年の長野県の自作農は県全体で六万八八二戸であり、全農家一九万五六二戸の三五・二パーセントにすぎず、馬の保有頭数のほうが少なかった。当時の農村では馬は主に運搬作業や厩肥製造のために使われていて、馬耕の普及率は一部の県を除いてかなり低く、長野県でも田の馬耕率は二八・〇パーセントにとどまっていたが、このことも馬匹保有者を限定する要因であったと考えられる。このように馬を保有することができたのは地主などの富裕な農民であったといえるのであるが、この点は碑に記

された応徴者名をみることによつて具体的に確認できる。

No.20「軍馬記念碑」は、松本市の南西に位置する山形村の下竹田地区<sup>(22)</sup>の公会堂敷地内に一九〇六年に建てられた碑である。山形村所蔵文書「明治三十七年度縣稅戸數割賦課等人名表」を用いて、碑に名前が記された建設者一九名が一九〇四年の時点で県稅戸數割のどの等級に相当するのかを調べてみよう。<sup>(23)</sup>

右の人名表は、表2のように全戸七八〇戸を四二等級に分けている。この表は、七八〇戸すべてが農業を主たる生業としているとは限らないため農家のなかでの経済的位置を厳密には表していないが、一八七六年の「村誌」の記述に「皆是農ヲ以テ本業トス」とあるように、全戸が大なり小なり農業に關係しているところからおおよその傾向は読みとれるであろう。これをもとに一九名の人たちの所属等級を見ると、七・八・二〇・二四・二八・二九・三一・三四・三五・三八等級のそれぞれに一名ずつ、二五・二六等級に各三名、三二等級に二名、不明一名となる。したがつて、三八等級に属する一名以外は全員が二名の富裕層をふくむ中層以上の農家なのである。

一九名のなかで碑建設の中心となつたと推定されるのは唐澤武十郎であるが、彼は一八九二年五月現在の長野県内衆議院議員選挙資格保有者一万〇八五九名のなかの山形村三二名のうちの一人として名前があげられている。選挙資格保有者名簿によると、彼は地租三三円七八錢四厘を納めており、その額は村内の有権者では一番目に多い額である。<sup>(24)</sup>地価の一〇〇分の二・五が地租であるから、武十郎が所有していた土地の地価は一三五・一円三六錢となる。さらに、一八八二年の「地租改正報告書」によれば、田地の反当り地価が四・一円一六錢二厘であるから、すべて田地とすれば約三・三町歩となり、また、畑地の反当り地価は一三・三円三四錢であるから、すべて畑地とすれば約一〇・一町歩の面積となる。一九〇九年の数字ではあるが、所有地三町以上の農家の比率は長野県全体で五・七パーセント、東筑摩郡で五・二パーセントにすぎないから、<sup>(27)</sup>唐澤武十郎はかなりの規模の地主であつたといふことが理解できる。

この「軍馬記念碑」と同時期同じ山形村につくられた碑にNo.18「日露戦役駿駒霊」碑がある。この碑は一六名の旧飼主によってつくられたのであるが、建設者のひとりに永田久吉という人物がいる。彼は先の衆議院議員選挙資格保有者名簿では、村内で二番目に多い一四九円二〇銭五厘の地租を負担していて、これは唐澤武十郎の負担額の四・四倍にものぼる額である。永田久吉が村内屈指の大地主であったことがわかるのである。

この一八九二年五月現在の長野県内の衆議院議員選挙資格保有者名簿には、山形村以外のいくつかの碑の建設者名も含まれている。一例をあげると、これは日清戦争後の碑であるが、東筑摩郡和田村(現松本市和田)に一八九九年に建てられた軍馬碑の建設者二名のなかで、窪田融太郎(五五円六一銭二厘)・吉田市平(六一円八〇銭九厘)・萩原三作(三五四円四二銭三厘)・上條安治(次郎)(三三円五四銭五厘)・宮嶋清九郎(九〇円三五銭五厘)の五名が衆議院議員選挙資格保有者である。その地租負担額はかつこ内に示した額であり、彼らも唐澤武十郎と同程度かそれ以上の土地所有者であったのである。

このように軍馬碑の建設者のなかには地主として経済的に豊かな階層に属していた人物が含まれているのであるが、彼らはそのうえ、単に富裕であっただけでなく村会議員や村長として、村の政治において指導的な立場にある人びとでもあった。たとえば「日露戦役駿駒霊」碑の永田久吉は一八八一年に村会議員に選ばれ、つづいて一八八九年から一八九三年の間町村制施行後最初の村長に任命された。その後、一九一〇年にも村会議員に選ばれている。また、「軍馬記念碑」と、後にとりあげる日清戦争の「軍馬塚」のどちらにも建設者として名前が上がつっている唐澤武十郎と鈴木彦一は、何度か村会議員に選出されているが、なかでも唐澤武十郎は、一八七九年の最初の村会で議長に任命され、また、永田久吉の後任として一八九三年から一八九六年の間第二代村長をつとめた。日露戦争開戦の年、一九〇四年にも村会議員に選ばれている。そのほか「軍馬記念碑」建設者のひとり古畑藤茂も村会議員に選ばれ、一四代村長に就任している(一九一七年～一九一九年<sup>(28)</sup>)。

以上のことから唐澤武十郎や永田久吉らは、いわゆる地方名望家の範疇に含まれる人物であったとみて差し支えないであろう。地方名望家は、「地域のなかで経済力・指導力を備え、地域住民の代表として行政にたずさわる資質・能力を期待されて、地域住民から高い尊敬をうける名誉と人望をもっていた」<sup>(29)</sup>。それ故に唐澤武十郎らは、戦争という国の命運を左右する重大な出来事に対し積極的に意思表示をすることを期待される立場にあったのである。彼らは、国をあげての戦争であった日露戦争に自分自身は兵役を免れ戦場に赴かなかったかわりに、大切な馬を国家に差し出すことによつて責任と義務を果たしたと自負した。いわゆる「ノブレス・オブリジュ」にあたるが、軍馬碑を建てることによつて自分たちの行為を村の内外の人びとに示すとともに、後世の記憶のために残したかったと考えられるのである<sup>(30)</sup>。

## 第四章 長野県山形村の日露戦争「軍馬記念碑」

### 第一節 「軍馬記念碑」の碑文の特異性

さきにもふれた山形村の「軍馬記念碑」の碑文をとりあげ、碑文の意味するところをさらに分析してみよう（この碑と次の「軍馬塚」の碑文は筆者の現地調査により一部訂正した）。

#### No.20 軍馬記念碑

明治三十七年日露之役起也我軍転闘于満清之野戦域殆垂百里輜重之運搬亦伴之於是徵馬匹于全国以充其用我下田田一区而応徴発者正十有九頭蓋見選拔者成駿逸平素其主之所愛使也雖然王事靡盬今也慈子愛孫且在彈丸雨飛之間不敢顧軀命況於家畜乎乃割私愛送之矣今雖其死其生不可知渠皆服役於戦地者不容疑如其存亡固非深所問也抑馬匹

之堪使役也大約年齒不踰二十而駿驚等死於槽檻之間然而渠各以出群之材擢於国家有事之秋俱斃於王事可謂死亦有餘榮焉于茲旧主相謀以去其旣之日為永訣之紀念建碑錄功以追弔矣

百瀬為次郎・高山三郎次・古畑時次郎・唐澤武十郎・上條喜十・百瀬惣次郎・児玉伴三郎・林朝市・百瀬佐喜市・古畑藤茂・村上丑市・上條茂喜藏・百瀬宇十・村上千代十・斉藤六江藏・百瀬冶三郎・斉藤吉次郎・鈴木彦一・百瀬松彌

明治三十九年三月中澣

この碑は、日露戦争の際、下竹田区から徵発された一九頭の馬の飼主一九名によつて建設された、前章の区分に従えばIIのタイプに属する碑である。しかしその碑文は、徵発に応じた事実を記すにとどまらず、太字部分のように「国家有事之秋」に「王事」のために倒れることは榮譽というべきだとも記していて、他の旧飼主が建設した碑が馬匹を供出した事実のみに限つて記しているのとは異なっている。もつとも榮譽と記してはいても、日露戦争に出征した軍人が乗馬のために建設した、Iのタイプに属するNo.6の「愛馬碑」などが、戦場で大いに活躍し「君国」のために貢献した自馬の功績の大きさを強調しているのとは違つて、この碑では傍線部のように供出した馬たちの戦場での働きについては、「其死其生不可知渠皆服役於戦地者不容疑如其存亡固非深所問也」とだけ記して、功績を強調するどころか生死も不問に付しているのが注目される。

こうした特徴をもつ「軍馬記念碑」であるが、この碑の建設者と重なる人々は、日清戦争後の一八九八年にも同じ下竹田公会堂敷地内に「軍馬塚」と碑銘された碑を建設している。しかしその碑文は次にみるように、「軍馬記念碑」の碑文とトーンがかなり異なっている。

## 軍馬塚

我信濃国古以牧場有名出良馬不少中世以降廢絶久矣明治征清之役陸軍省徵発軍馬也東筑摩郡山形村下竹田區亦応之出十七頭蓋皆駿逸也今茲戊戌冬飼養主相謀勤諸石以為紀念云 齋藤順撰文 石川老雲書

三十一年十二月二十七日建之

塚本喜藤太・村上利市・唐澤與十・百瀬喜市・百瀬栄市・百瀬三代三郎・村上惣次・石川市太郎・村上諫二郎・鈴木彦一・齋藤初太郎・林條市・唐澤武十郎・山口武十・齋藤常吉・大久保作藏

みられるとおり、日清戦争の「軍馬塚」の碑文には、徴発に应じて一七頭の馬を出した元の飼主たちが記念のために碑をつくったと書かれているだけで、「国家」や「王事」という文言はみられない。すなわちどちらの碑も徴発に应じて馬を供出した、なかには同一人物も含まれる飼主たちによつて建設されているのであるが、日露戦争の碑には、日清戦争の碑と趣旨の異なる碑文が記されているのである。ちなみに、日清戦争期に長野県で建設された軍馬碑は現在二二基が確認され、そのうち一四基に碑文が刻まれているが、それらの碑文を見ると、いずれも徴発に出した馬の数と徴発者の氏名のみを記すことが基本になっている<sup>①</sup>。

このように「軍馬記念碑」は、同一人物を含む旧飼主たちがつくった日清戦争期の碑や日露戦争期に他の旧飼主が共同で建設した碑のように単に出馬の事実を記したものとも、また軍人たちが建てた碑のように軍馬の功績をたたえたものとも異なる碑文が刻まれているのが特徴である。こうした特徴は、日清戦争と日露戦争に対する戦争観のちがいや時代の特徴が反映したものと推測されるが、次にこの点について考えてみたい。

## 第二節 唐澤武十郎と自由民権運動

唐澤武十郎は村会議員として、また村長として村政で重責をはたしたとみなして差し支えないであろうが、彼の活動の場は村の中にとどまらなかった。彼は、松本平を中心に結成された政治結社奨匡社の社員として国会開設運動にも参加したのである。

一八七七年の西南戦争後、専制政治に対する闘いは武力によって政府を打倒するものから言論によるものへと発展し、各地で国会開設を求める政治結社が生まれた。長野県でもいくつかの地域で民権結社が結成され、新聞・雑誌での議論や討論会、演劇の上演などが盛んに行われた。そのなかで、一八八〇年四月に松本で結成されたのが国会開設をめざす結社奨匡社であった。同年八月の社員名簿には一〇六九名が名を連ね、うち東筑摩郡から五六六名、山形村からは唐澤武十郎・永田久吉ら四名の氏名が掲載されている。<sup>(35)</sup> 社員の構成は、士族は少数で、戸長や町村会議員などをつとめる豪農・豪商と教師が多いのが特徴であった。奨匡社は、国会期成同盟に参加し、県下全戸数の一割にも及ぶ請願署名を集めるなど、その活動は全国的にも注目された。<sup>(34)</sup>

唐澤武十郎は安政四年（一八五七）五月八日生まれで、奨匡社結成時は二三歳の血気ざかりの青年であった。彼が奨匡社の中でどのように活動したかは今のところ不明であるが、結成大会で常備議員に選ばれているところをみれば、<sup>(35)</sup> けっして名前だけの社員ではなく積極的な活動家であったと推測される。<sup>(36)</sup> 二二歳で山形村の村会議長に選ばれた際、最初の村会で傍聴人規則を決めるにあたって、女性にも傍聴を認めるよう主張したことからも、「民権」に対する燃えるような意気込みを感じることができるのである。<sup>(37)</sup>

研究史の上で明らかにされているように、自由民権運動においては「民権」の実現と「国権」の確立とが密接に結びついており、「民権運動は政府に議会開設を要求するとともに、国家の運命に自分の運命をかさねる」「わが国」



意識、「国民」意識を民衆にもたせようとする運動だった」といわれる。<sup>38</sup>したがって唐澤武十郎も、国会開設運動に加わるなかで「国民」意識を高め明治国家のありように深い関心を抱いていたと考えられ、おそらくそのことが日露戦争「軍馬記念碑」の碑文のなかに「国家」や「王事」という文言を書き込ませる素地になったのではないかと推測される。

ただ、奨匡社の運動が展開された一八八〇年と日露戦争とは大分時間的ずれがあることから、国会開設運動に参加したことが「軍馬記念碑」の建設に直接結びつくとはいえないであろう。可能性として考えられるのは、奨匡社の運動が衰退した後も、唐澤武十郎が何らかの政治運動にかかわっていて、そのことが影響したということである。しかし、仮に唐澤武十郎が何らかの政治運動にかかわっていたにしても、日清戦争期に建てられた、彼が建設の中心となったと推測される「軍馬塚」には「国家」の文言が見られないこともまた事実である。したがって、日露戦争の「軍馬記念碑」に「国家」の文言が記された要因を考えるにあたっては、碑を建てた人々の日露戦争に対する戦争観が日清戦争のそれとは異なっていたという点を重視する必要があるように思われる。なにが唐澤武十郎をして「軍馬記念碑」に「国家」の文言を刻ませたのであろうか。日露戦争が、戦争の渦中にあつた地域の人々にどんな影響を与え、どのような戦争観を生み出したかを問うことによって、それが明らかになるであろう。

### 第三節 日露戦争における国民の戦争認識

『信濃毎日新聞』に「軍馬の戦功」と題する社説が掲載されたことは先に紹介したが、ここでは「戦争は軍人のみにて為し得べきものにあらず。国民挙つて軍隊の後援となり、軍隊の後押しとなり、所謂挙国一致の実を現はして茲に初めて軍人をして目覚ましき戦功を樹てしめ得べし」ことが強調されていた。軍馬の戦功もその文脈の中で

取り上げられていたのである。

大ロシアに対する勝利は村の農民の意識に変革をもたらした。ロシアに勝つことができたのは、華族や士族の働きではなく、まさに平民である百姓の勇敢な戦いと犠牲の結果にほかならないという認識が生まれた。たとえば、『信濃毎日新聞』に「平民の子、軍人としての面目」と題する社説が掲載されているが、そこには、<sup>(39)</sup>

「或人が頻りに東郷大将の偉勲高德を称して、これを生神と崇むるも過当にあらざるを説き、進んで論功行賞の事に及び、何とかしてアノ様な偉大の人物には、華族などといふ怪しき尊号を与えず、何処までも一個の東郷平八郎として存在せしめ、平民の花と仰ぎたきものなり。(中略)余は、切に東郷大将が、少数の華族仲間に入らずして、国民の八九分通りを占むる大多数の平民中に在りて、永世、其尊敬を受けむことを望むと、殆ど涙を流さむばかりに説き立てたる」

というエピソードが紹介されている。

このエピソードからうかがわれるように、日露戦争の勝利は華族・士族や高位の軍人によるものではなく国挙げでの戦いの結果であるという認識が民衆のなかにひろがり、戦いに直接間接に参加することを通して「国民」としての意識が形成されていったのである。「国家を支えているのは我々だ」という「国民」意識が芽ばえる過程については、牧原憲夫が東京府南多摩郡稲城村の日清・日露戦争に関する農民の日記や手紙を分析して、壮行会の「万歳」や励ましの声を背に出征し、戦闘を体験するなかで、やがては決死の覚悟と敵愾心、アジアへの蔑視意識をもつにいたる様相や、出征兵士の見送りや村葬、凱旋祝賀式がつづくなかで、村に残された農民や子どもたちの間にしだいに軍国主義に同調する意識が浸透していく様相を明らかにしている。<sup>(40)</sup>

日露戦争で長野県下から動員された陸海軍人は総数二万八四七〇人におよび、それは日清戦争の約七倍にあたる。大部分は陸軍の下士兵卒であり、全従軍者の八割が召集兵であった。これは兵役年令の人口八人に一人の割合に相当し、多くの農村の中堅的働き手が戦争にうばわれたことになる。<sup>(1)</sup>山形村が含まれる東筑摩郡からは、現役五六三名、現役以外二三三八名、計二九〇一名が下士兵卒として陸軍に従軍した(他に将校八三名、海軍九二名)<sup>(2)</sup>。この三〇七六名という数は、県下各郡のなかで最も多く、当時の東筑摩郡の男性人口の三・七パーセントに相当する。しかも、その八・三パーセントにあたる二五四名が戦病死した。<sup>(3)</sup>そのため各種の救護団体がいつせいに組織され、出征軍人に対する恤兵金募集、軍人遺家族に対する救助、政府への軍資金献納などが行なわれた。<sup>(4)</sup>山形村でも恤兵会がつくられ、出征兵士と銃後住民の団結をかため、出征兵士を激励する活動が行なわれた。<sup>(5)</sup>

戦争が大規模化するなかで県民の戦争熱は加熱していった。学校では教師たちによる時局講話・訓話がしきりに行なわれ、また講師や新聞記者による講演会・演説会や巡回幻燈師による戦争幻燈画の上映会なども催された。これらは子どもたちや大人たちを興奮のつばにまきこみ、戦争支持の方向へ人びとを動員していった。また、戦地への慰問状の送付、軍人の歓送迎や戦没者葬儀参列が大々的に行なわれた。<sup>(6)</sup>さらに戦争終結後には凱旋軍人歓迎会が町や村をあげてお祭騒ぎのような雰囲気の中で挙行され、戦没者のための「忠魂碑」も次々と建てられた。こうした熱狂的な時代の風潮を背景に、地方名望家としての立場から唐澤武十郎らが日露戦争の「軍馬記念碑」を建設したのである。その目的は愛馬の死を悼むことにとどまらず、「国家有事之秋」に「王事」のために自家の馬を供出したことを記すことで、「国民」としての義務を果たしたという事績を近隣に伝え、後世の記憶に残すためであったと考えられる。

## むすび

唐澤武十郎という人物に焦点をあて、軍馬碑がつくられた要因を考察してきたが、結論を次のようにまとめることができる。

長野県内の日露戦争期の軍馬碑は、碑文から

I、軍人が戦場で使役した馬のために建設した碑 II 日本の軍隊の勝利と軍人の栄誉をたたえ、軍馬の功績を強調している。

II、社会的経済的に有力な階層の農民が建設した碑

A II 飼主が自分の馬を供出した事実のみを記している。

B II 「国家有事」にあたって「王事」のために自分の馬を供出したことに言及している。  
に分類される。

これらのうち II - A が長野県における日露戦争期の軍馬碑の主要な形態である。そして、日清戦争期の軍馬碑の現在長野県内に残っているもので碑文が刻まれているものもすべてこのタイプであるから、長野県における日清戦争と日露戦争のどちらの時期につくられた軍馬碑も II - A のタイプが一般的な形態だということになる。

II のタイプの碑は、富裕な地主であり村政の指導層であった馬の旧飼主たちによって建設された。その碑文には、国をあげての戦争に際して自身は兵役を免れ戦場に赴かなかったが、その代りに大切な愛馬を供出することによって国家のために義務を果たしたのだという意思を読みとることができる。つまり地方の名望家が「ノブレス・オブリージュ」にのっとって彼らの意思を形に表したものであり、軍馬碑建設の目的の一つはこの点にあったのである。このタイプの碑が軍馬の功績を記さなかったのは、日清・日露戦争において軍馬の「武勲」が大々的にたたえられる

ことなく、その「美談」化が展開されなかったことを反映しており、戦争が「国家総力戦」の端緒的段階にあったことに対応するものであったといえよう。

II—Bタイプに属する碑は「軍馬記念碑」だけで、この碑は「国家」という文言を特別に記した特徴ある碑文をもつ。この特異な碑は、自由民権運動に参加した唐澤武十郎という人物の資質と、彼が育ったその時代、その地域の特質が作用して建設された。すなわち、国会開設運動に参加し、「国家」のあり方を問うことができた人物が、「国家総力戦」の端緒をなした日露戦争の渦のなかで、高揚する戦争熱を背景に民衆のなかに「国民」意識が形成されていった時、地方名望家として「国民」の義務を果さねばならないという強い意識をもったことがこの特色ある碑をつくらせたのであった。

以上、長野県山形村に現存する軍馬碑をとりあげ、日露戦争に対する地域住民の認識が軍馬碑にどのように表れているかを考察した。次の課題として、日中戦争期になると軍馬碑はどのように変化するかという問題がある。日清・日露戦争期に見られたIIのタイプの碑は日中戦争期にも依然としてつくられるが、しかし日中戦争期には帝国在郷軍人会などの軍に関係した組織が建設した碑や、「出征」と刻まれた多数の碑が出現する。日露戦争期と違った特徴が何を意味するのか、その解明は今後の課題である。

## 註

(1) この数字は、諸文献記載の資料、筆者による現地調査、各地の歴史(郷土)資料館や教育委員会などの関係機関からの提供資料などによって判明したものを集計した結果による。

(2) 松崎圭「近代日本の戦没軍馬祭祀」(中村生雄・三浦

佑之編『人と動物の日本史4 信仰のなかの動物たち』、吉川弘文館、二〇〇九年)

(3) 陸軍省編『明治三十七八年戦役統計第十三編軍馬』一〇頁(防衛庁防衛研究所復刻『日露戦争統計集第十一巻 第十三編軍馬』、東洋書林、一九九五年)

なお、この数字を日中戦争での軍馬の損耗数と比較す

ると、日中戦争時の全体的な状況は不明であるが、北支那方面軍の損耗馬は開戦から一九三七年十二月までに一万九一三頭、一九三八年一年間で一万六八三四頭、一九三九年一月から九月までに七四七四頭という数字があげられている(「事変発生以来発病並損耗馬累計調査表昭和十四年九月三十日現在」(「戦時月報送付ノ件」(一二)、昭和十五年「陸支密大日記」第一五号二/三)、アジア歴史資料センターデータベース、レファレンスコードC04一〇三三二六〇〇)。一つの方面軍だけでも日露戦争の総損耗馬数をこえる犠牲を出しているのであり、損耗率はともかく損耗数からいえば日露戦争の軍馬の犠牲は日中戦争に比べまだ小規模にとどまっていたといえる。

## (4)

日露戦争の戦場での軍馬の状況については、たとえば『明治三十七八年戦役忠勇美譚』に掲載された手記のなかに次のような記述がある(教育総監部編『明治三十七八年忠勇美譚』東京偕行社、一九〇七年)。

「当日は降雨後なりしかば道路の泥濘險悪筆舌に尽くし難し。殊に二輪荷馬車はその構造上重大なるにより人馬共に頗る困難す。(中略)坂路に加うるに甚だしき泥濘なるを以って(中略)馬匹は最早疲労の極に達せり」(第一編一四)

「此行程十二里加うるに前日來の疲労未だ癒えず。為めに当日の行軍に於ける人馬の疲労著しきを覚えたり。(中略)正午頃に至り行李駄馬一頭疲労の爲め頗る歩行に難み落伍せる」(第一編一六六)

「奉天付近の会戦に当りては二十日間連続一日平均十九時間以上の労役に服し人馬疲労極点に達せし」(第三編一九九)

「砲戦中段列の位置に敵弾の落下すること甚だしく遂に上等兵の輓馬に向つて全弾破裂し四頭の馬匹斃死する」(第三編二二七)

「上陸當時は道路泥濘炎日燬くが如く、加うるに積載貨物の過重なるより馬匹或は斃れ或は擦傷して使駁に堪えざるもの続々として相次ぐ」(第四編五八)

## (5)

日露戦争当時、雑誌・画報に掲載された錦絵や石版画が戦況を伝えたほか、商店の引札・双六などにも戦争の場面が描かれ、芝居・講談や幻燈会なども戦争をテーマに上演された。それらは、「福島中佐のシベリア横断」「軍神橘中佐」などの題材を扇情的にとりあげて戦争ムードを過熱させ、人々を熱狂させた(和泉市いずみの国歴史館平成二十一年度冬季企画展「描かれた戦争、創られるイメージ」刷り物で見る日清・日露戦争と東アジア―)図録、二〇一〇年)。

## (6)

『信濃毎日新聞』一九〇四年四月十二日号

## (7)

『信濃毎日新聞』一九〇五年四月一日号

## (8)

籠谷次郎「市町村の忠魂碑・忠霊塔について」「戦没者碑と忠魂碑」(『近代日本における教育と国家の思想』所収、阿吽社、一九九四年)

## (9)

『信濃毎日新聞』一九〇六年七月二十二日号

## (10)

坂井久能「戦没者等記念碑の教材化に向けて」の付表によると、神奈川県では、西南戦争後から一九九七年に

至る間に建設された戦没者碑が七三〇基残存しているが、そのうち一九〇四年から一九一一年にかけて建設された碑は一八〇基で、一年間あたりの建設数では一九〇六年の七四基が最も多い(『近現代の戦争に関する記念碑』一九頁、国立歴史民俗博物館「非文献資料の基礎的研究」報告書、二〇〇三年)。

- (11) その主要な成果は、常盤真重「長野県の軍馬碑」(長野郷土史研究会機関誌『長野』第一八三号所収、一九九五年)や、関口樸郎『軍馬碑の調査「長野県中信・南信地域」』二〇〇五年、同『軍馬碑の調査「長野県北信・東信地域」』二〇〇六年、などに報告されている。

- (12) 加用信文監修・農林統計研究会編『都道府県農業基礎統計』農林統計協会、一九八三年

- (13) 『明治三十七八年長野県時局史』六〇～六二頁、一九〇八年

- (14) 前掲『都道府県農業基礎統計』

- (15) 前掲『明治三十七八年長野県時局史』一一六～一一九、一六四頁

- (16) 前掲『軍馬碑の調査「長野県北信・東信地域」』六二頁

- (17) 前掲『軍馬碑の調査「長野県中信・南信地域」』三四、三七頁

- (18) 『畜産統計 第六巻』農商務省、一九〇九年

- (19) 前掲『都道府県農業基礎統計』

- (20) 『長野県第二十一統計書』一九〇五年

- (21) 清水浩「牛馬耕の普及と耕耘技術の発達」掲載の田に

おける牛馬耕普及率変遷表(農業発達史調査会編『日本農業発達史』四〇四頁、中央公論社、一九五三年)の数字に牛馬頭数に占める馬の比率を掛け、田の馬耕普及率を算出した。

- (22) 山形村は一八七四年に大池村・小坂村・竹田村の旧三村が合併して生れた。大字は編成されていないが、俗に上大池・中大池・下大池・小坂・上竹田・下竹田の六地区から構成されている。

- (23) 以下の数字は、原史料の閲覧が認められなかったため、山形村教育委員会から提供された資料にもとづいている。

- (24) 『村誌やまがた』三九七頁、一九八〇年。なお、『明治九年村誌』は一八七八年に筑摩県参事高木惟矩に提出されたもので、それによると山形村は、戸数六四五戸、人口三〇九三人(すべて平民)、馬三一四頭となっている。日露戦争当時の一九〇四年の戸数は七八戸、人口は四三三二人である(『長野県第二十一統計書』)。

- (25) 西沢俊司編『信濃名誉録』(渋谷隆一編『都道府県別資産家地主総覧 長野編』所収、一九九七年)

- (26) 『地租改正報告書』(大内兵衛・土屋喬雄編『明治前期財政経済資料集成 第七巻』所収、一九六三年)

- (27) 『長野県史第七巻 近代1』五九〇頁に掲載の小作地率・農家構成比率による。

- (28) 前掲『村誌やまがた』四〇六～四〇七、四一九頁

- (29) 山中永之佑『近代日本の地方制度と名望家』二一五頁、弘文堂、一九九〇年

- (30) 山形村に現存する日清・日露戦争期の軍馬碑に刻まれ



ている建設者は七六名を数える。この七六名について、一八九二年と一九一二年現在の衆議院議員選挙権有資格者、および村長職・村会議員就任歴を調べると、衆議院議員選挙権有資格者は一八九二年の時点で六名、一九一二年の時点で二九名である。また、村長に就任したのは三名であるが、村会議員には一六名がのべ四一回選ばれている。これをみても碑の建設者が社会的経済的に有力者であったことが明らかである。

(31) 日清戦争にかかわる長野県内の軍馬碑の一覧は表3のようになる。そのうちの主な碑の碑文は関口樸郎の前掲書によれば次の通りである(番号は表3に対応する。筆者の現地調査の結果一部訂正した)。

# 1. 軍馬記念碑

石梁戢拜書 明治三十六年十二月吉日建之

西桐中 發起人遠山周次・中村治三郎

日清戦役徵発馬主 籤順 山内兼一・山内熊太郎・新井

助次郎・中村利九治郎・横山仲次

籤順 津島兼次郎・新井源一郎・遠山得一・大和作馬・

百瀬八郎平・山内仲次郎・石澤猪太郎・高野松枝・中村

儀一

# 2. (征清之役軍馬記念碑)

征清之役和田村所徵発之馬前後其数二十四斯蒙主等相謀建紀念之碣属余作銘是敝帷不棄之情不忍辭之乃銘曰大旆西征戰馬應選騎駄從軍任重致遠韓山遼野苦心淬勉立石紀念可謂甄善 窪田畔夫撰書

明治三十二年一月建

建者姓名 窪田融太郎・上條萬三郎・上條廣一郎・福澤龜彌・百瀬良甫・市川嘉一・青沼藤一郎・上原辨次郎・吉田市平・市川勇三郎・遠藤源吉・宮嶋清九郎・宮嶋源吾・大和勘治・萩原三作・矢崎秀一・百瀬幸作・上條傳一・菊池里平・萩原儀一・上條安治郎

# 4. 馬頭觀世音

明治二十七八年戰役第一師団野戰騎兵第一大隊第二中隊第三小隊第一分隊 從軍乘馬

花空号・青毛 橋森号・栗毛 大野号・青毛 大縣号・

全 誠志号・全 臥早号・全 蹄霞号・鹿毛

柚木号・全

元第一師団野戰騎兵第一大隊第二中隊第三小隊第一分隊長 陸軍騎兵上等兵 小林徳松

明治三十年二月十日建之

# 5. 征清軍馬記念碑

明治三十一年四月建立 小曾部区中

明治二十七八年徵発応命者 姓名戸番順

二期 橋原壽八郎・一期 青柳小市・二期二期 青柳孫

十・二期 北澤龜十・二期 中原藤八・二期 北澤喜三

郎・一期 田中孫十・二期 太田三治郎

石工 成田清十

# 6. 征清軍馬之碑

陸軍歩兵少佐從六位勲四等大屯蒙額

皇朝征清大市民馬以充役役信濃国東筑摩郡蘆野田郷亦納七匹載人服輜尤称健歩及事平諸軍響馬邨人往求馬群馬雜



表 3 長野県における日清戦争軍馬碑

|    | 碑 銘                 | 所 在 地                      | 建設年月日      | 建 設 者           | 典 拠   |
|----|---------------------|----------------------------|------------|-----------------|-------|
| 1  | 軍馬記念碑               | 松本市入山辺西桐原・柴宮               | 1903・12    | 山内兼一ら14名        | N・G   |
| 2  | (征清之役<br>軍馬記念碑)     | 松本市和田、和田神社前                | 1899・1     | 窪田融太郎ら21名       | G     |
| 3  | 馬頭観世音               | 飯田市松尾、明集会所前                | 1895       | (共同)            | N     |
| 4  | 馬頭観世音花空号<br>橋森号大野号他 | 伊那市西箕輪上戸区<br>梨ノ木北入口        | 1897・2・10  | 陸軍騎兵上等兵<br>小林徳松 | N・G   |
| 5  | 征清軍馬記念碑             | 塩尻市洗馬小曾部3704-4<br>小曾部保育園   | 1898・4     | 橋原壽八郎ら8名        | N・G・R |
| 6  | 征清軍馬之碑              | 塩尻市洗馬芦ノ田<br>慈眼山心念堂         | 1897・2     | 田村九八ら5名         | N・G   |
| 7  | 馬頭観世音<br>軍馬深山号子     | 中野市平岡地区竹原<br>字十二ノ木         | 日清戦争カ      |                 | NK    |
| 8  | 軍馬馬頭尊               | 東筑摩郡波田町下波田<br>大月康正宅        | 1895カ      | 大月惣太郎           | G     |
| 9  | 馬頭観世音<br>陸軍御用馬匹     | 東筑摩郡波田町中波田<br>中波田新田、観音広場   | 1895カ      | 久保澤竹吉           | G     |
| 10 | 征清軍戦役馬<br>馬頭尊       | 東筑摩郡波田町上波田・淡路              | 1895・3・5   | 百瀬元弥            | G     |
| 11 | 徴発令軍馬               | 東筑摩郡麻績村上井堀細川、<br>マツゴルフ場横   | 1894・8・22  | 飯森幸四郎           | G     |
| 12 | 馬頭尊                 | 東筑摩郡山形村上大池、<br>コミュニティセンター南 | 1896・3     | 古畑綱吉ら10名        | N・G   |
| 13 | 征清軍馬碑               | 東筑摩郡山形村小坂、<br>宝積寺          | 1895・5     | 平林苦蔵ら13名        | N・G   |
| 14 | 馬頭観世音               | 東筑摩郡山形村上竹田                 | 1902       | (個人)            | N     |
| 15 | 馬頭観世音               | 東筑摩郡山形村上竹田                 | 1895       | (個人)            | N     |
| 16 | 軍馬塚                 | 東筑摩郡山形村下竹田、<br>公会堂敷地       | 1898・12・27 | 塚本喜藤太ら16名       | N・G   |
| 17 | 征清之役徴発馬<br>馬頭尊      | 東筑摩郡山形村下竹田、<br>公会堂敷地       | 1897・9・20  | 百瀬字十            | G     |
| 18 | 馬頭観世音               | 東筑摩郡山形村下竹田                 | 1895       | (個人)            | N     |
| 19 | 龍駒之群霊               | 東筑摩郡朝日村古見・犬ヶ原、<br>村営住宅下    | 1897・4     | 上條茂一ら25名        | N・G   |
| 20 | 征清軍馬記念碑             | 東筑摩郡朝日村針尾<br>大尾沢口          | 1897・7     | 高橋善十ら8名         | N・G   |
| 21 | 軍馬観世音               | 東筑摩郡朝日村針尾<br>大尾沢、血取場       | 1897・3・17  | (個人)            | N     |
| 22 | 軍馬記念碑               | 東筑摩郡朝日村小野沢・新田              | 1900       | (共同)            | N     |

注 典拠欄の記号は、それぞれ次の文献によることを示す。

N・Gは、表1と同じ

NKは、「中野市の石造文化財」(中野市教育委員会、2005年)

Rは、「非文献資料の基礎的研究」報告書『近現代の戦争に関する記念碑』

(国立歴史民俗博物館、2003年)

踏難辨其故馬且生死亦不可知無然而帰遂欲建碑寓追念謁余叙之因系以詩曰（詩は省略）

明治三十年二月建之

明治二十七八年征清役 應徵馬主

二頭 田村九八・二頭 熊谷惣六・同 古牧喜一郎・同

寺澤福治郎・同 小幡末藏・同 長野直三郎

同村石工 大熊金作

軍馬馬頭尊

明治二十八年一月八日出 大月惣太郎

馬頭觀世音

為明治二十八年陸軍御用馬匹供養 久保澤竹吉

馬頭尊

征清軍戰役馬 百瀬元弥敬建

時于明治二十八年三月五日

徵発令軍馬

明治二十七年八月二十二日 飯森幸四郎

馬頭尊

征清之役官徵発馬匹乃出馬拾頭今茲明治二十有九年立碑

表之可謂美挙矣余一屯應需書之

建設者 上大池 古畑綱吉・古畑九市・中村與次郎・大

池與十・大池奈知弥・大池登・堤團治郎・堤幾十・籠田

吉弥・中村房吉

明治二十九年三月中浣

征清軍馬碑

一屯書 明治二十八年五月建之

二頭 平林吉藏・一頭 倉沢喜代藏・全 唐沢安太郎・

全 住吉喜代八・全 山口萬次郎・全 小野政太郎・二

頭 百瀬兼次郎・一頭 百瀬生吉・全 三枝倉十・全

小林九郎・全 唐沢政太郎・全 小林喜代太郎・全 宮

本吉十

馬頭尊

征清之役余家之馬徵発為軍馬雖生死未詳蓋至榮也錄以為

紀念 百瀬宇十建之

明治二十二年十一月二十七日 明治三十年九月二十日

龍駒之群靈

明治二十七八兩年征清之役政府徵発馬匹應命出數十頭今

茲為記（紀カ）念立石以伝之不朽云 桂洲居士書

明治三十年丁酉四月

朝日村古見区 姓名順叙因中籤

上條茂一・武田腰治郎・上條源三郎・上條隆一・上條寅

松・小林米藏・上條淺太郎・小林玉藏・二頭 二茅房治

郎・上條益三・武田與一・上條利市・清澤新太郎・清澤

杉藏・武田啓治郎・上條勇治郎・上條新治・上條策市・

上條幾治郎・二頭 高橋登市・清澤長十・武田與惣治・

上條七老・原岡一・齊藤亦五郎

征清軍馬紀念碑 墨溪書

明治二十七八年徵発 明治三十年七月建之

順序抽籤ヲ以ス

針尾区 高橋善十・二頭 粟津原運藏・二頭 粟津原音

十・高橋重次郎・清澤鹿十・齊藤玉司・粟津原胎治郎・

粟津原音彌

当郡洗馬村 石工 永田金一

- (32) 唐澤武十郎が村会議員に選ばれたのは一九〇四年が最後であるが、それまでに彼が村会議員・村長としてどんな実績を上げたかは、残念ながら現在のところ不明である。村所蔵の文書が非公開であり、子孫の方の所在もつかめていない。

- (33) 「奨匡社社員名簿」一八八〇年。なお『村誌やまがた』の年表には、名簿記載の四名のほかに、上條梅里という人物も加盟していたと記されている。

- (34) 前掲『長野県史第七巻 近代一』三八一―三九二頁

- (35) 森本省一郎『松沢求策君伝』七―九頁。なお同書で唐澤武十が常備委員に選ばれたと記されているが、社員名簿には唐澤武十という名前はみられないので、これは唐澤武十郎のことと考えて差し支えないであろう。また、永田久吉は常備議員には選ばれていない。

- (36) 「奨匡社規則」(一八八〇年)によれば、常備議員は、

社長・副社長の下にあって、地方社員の疑問に報答する(第一章第四条)、社長・副社長・編輯人ともに大会議案を創定する(第七章第三条)という任務を帯びていた。

- (37) 前掲『村誌やまがた』四一〇頁

- (38) 牧原憲夫『民権と憲法』「はじめに」、岩波書店、二〇〇六年

- (39) 「信濃毎日新聞」一九〇五年十月三十一日号

- (40) 『稻城市史』下巻、牧原憲夫執筆分、三一三―三四八頁

- (41) 前掲『長野県史第七巻 近代一』七七〇頁

- (42) 前掲『明治三十七八年長野県時局史』五五―五八頁

- (43) 『長野県第二十二統計書』なお、山形村の出征軍人数は不明である。

- (44) 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』三七七―三七八頁、

- 郷土資料編纂会、一九六二年

- (45) 前掲『村誌やまがた』五九八頁

- (46) 前掲『長野県史第七巻 近代一』八三二―八三三頁